

浄土の証明

安 東 大 隆

はじめに

浄土教と呼称される教えの究極の目標は、その呼称の示すように「浄土」への往生である。

『経律異相』に次のような説話がある。

往昔有二瀾猴王。各主五百瀾猴。一王起嫉妬意。欲殺一王規圖独治。便往共鬪。鬪数不如。羞慚退去。到大海辺海曲之中。有大聚沫。風吹積聚高数百丈。瀾猴王愚癡謂是雪山。語群輩言。久聞海中有雪山。其中快樂其甘果恣口。今日乃見吾当先往行觀。若審樂者不能復還。若不樂者当還語汝。於是上樹尽力跳騰。投聚沫中溺死海底。余者怪之不出。謂必大樂。一一投中斷群溺死。

これは、大波の飛沫を雪山と勘違いして、水死した猿の王の話である。

本来、そうではないものをそうであると、思い込むと

ころから、悲劇が起こってくるのである。浄土もまた現代の知性の前に新しい理解が、模索されている。浄土の存在を考える時に、実在するか否か、また何処にあるかということも、古来論議されてきたところである。

「己心弥陀唯心浄土」という言葉があるように、阿弥陀仏も浄土も自分の心の中にあるという考え方がある一方で、西方に浄土があると理解し、そこへ往生したいと願う考え方もあった。

「浄土の存在を信じ、往生の爲の修業を行なう、そしてその結果、浄土への往生が実現したと信じる。」ということだけでは、純粹ではあるがいかにも心もとなない。そこで、なかば当然のように亡き人は本当に浄土に往生したのであろうか。ひいては、その浄土は言われているように確かに存在するのであろうか。何とかしてそ

れを確かめてみたいという願望が起こってくる。

その為の努力がここで問題にしようとしている「浄土の証明」である。

1

『更級日記』（引用は古典文学大系）には、阿弥陀仏来迎の夢を見たことが記されている。

天喜三年十月十三日の夜の夢に、ゐたる所の屋のつまの庭に、阿弥陀仏たち給へり。さだか見え給はず、霧ひとへ隔たれるやうに、透きて見え給ふを、せめて絶え間に見たてまつれば、蓮花の座の、土をあがりたる高さ三四尺、仏御丈六尺ばかりにて、金色に光り輝やき給ひて、御手かたつかたをばひろげたるやうに、いまかたつかたには、印をつくり給ひたるを、異人の目には見つけ奉らず、我一人見たてまつるに、さすがにいみじく、け恐ろしければ、簾のもと近く寄りても、え見奉らねば、仏「さは、この度は帰して、後に迎へに来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞えて、人はえ聞きつけずと見るに、うち驚きたれば、十四日也。この夢許ぞ、後の頼みとしける。

この記事は『更級日記』の中で唯一日付の明示されている箇所である。それはいかに作者である孝標の女がこの夢を大事にし、後世の拠所としていたかを物語るものである。阿弥陀仏は時として夢の中にその存在のたしかさを示するのとされていた。

仏はつねにいませどもうつならぬぞあはれなる人の音せる暁にほのかに夢にみえ給ふ

という『梁塵秘抄』の歌は、その間の事情を如実に物語っている。古典の世界と現在では「夢」についての理解が、大きく違っていることは既に周知のところである。夢は現実の不足を補うもの、次に来る現実を予言するものという色合いが強い。そういう意味で人々に重要視され、その行動に多くの規制や示唆を与えている。夢にみたり、夢に現れたりすることは、現実と同じ位の大事さと重さをもつて理解されていたものであり、当時としては十分な説得力を備えていたものであろう。

2

極楽に往生すべく様々な努力をする。臨終の時に臨ん

では、『往生要集』（引用は思想大系）「臨終の行儀にあ
るような方法によつて、その時を待つ。

△祇園の西北の角、日光の没する処に無常院を為れり。

もし病者あれば安置して中に在く（中略）その中に一
の立像を置けり。金箔にてこれに塗り、面を西方に向
けたり。

その像の右手は挙げ、左手の中には、一の五彩の幡の
脚を執り、仏に従ひて仏の淨利に往く意を作さしむべ
し。瞻病の者は、香を焼き華を散らして病者を莊嚴す。

△行者等、もしくは病み、病まざらんも、命終らんと欲
する時は、一ら上の念仏三昧の法に依りて、正しく身
心に當てて、面を廻らして西に向け、心もまた專注し
て阿弥陀仏を觀相し、心と口と相応して、声々絶ゆる
ことなく、決定して往生の想、花台の聖衆の來りて迎
接するの想をなせ。（中略）もし罪を滅することを得
て花台の聖衆念に應じて現前せば、前に准じて抄記せ
よ。

つまり、行満ち願に應じて、蓮台を掲げた聖衆が現前
するのである。その様子は聖衆來迎図などの形で現存し

ている。來迎に奇瑞を得ることにより、その往生が確實
なものであるということ、そこに集い結縁する人々に
示したのである。その具台的な様子は、例えば『平家物
語』の「灌頂卷」に、叙情豊かに、

中尊の御手の五色の糸をひかへつゝ、「南無西方極樂
世界教主弥陀如來、かならず引摺し給へ」とて御念仏
ありしかば、大納言佐の局阿波内侍、左右によつて、
いまをかぎりのかなしさに、こゑもおしまずなきさけ
ぶ。御念仏のこゑやうやうよはらせましましければ、

西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらにきこゆ。
と描写されている。この様子に触れた人々には、女院の
往生を疑う者はいなかつたであろう。特に「西に紫雲た
なびき、異香室にみち、音楽そらにきこゆ」は、その時
の現実にあつた奇瑞の様子を叙したものである。

臨終に何等かの奇瑞の様を述べることは、極樂への往
生が確實であることを証明してみせているのである。

また、前述したように臨終に極樂から迎へに来るとい
う考え方、「來迎」は、広く信仰されていたものである。
「迎え講」もその延長線上にある。（臨終に來迎を受ける

ことが必要であるという考えは、後、親鸞は『末灯抄』により否定している。) 来迎を待つこと必切なる余り、野猪に騙された話(『今昔物語集』二十一十三)や、杉の木の上に留め置かれた話(『今昔物語集』二十一十二)などがある。

さて、臨終に奇瑞を現じて逝去したとしよう。しかし、その逝去がはたして往生なのか否かはには断じがたいものがある。

そこで、その証拠を求めて今は亡き人との接触が図られる。その証拠を示す努力は、一つには、死者が蘇生して事の次第を語るものである。

よく知られているものに行基と智光の説話がある。智光は行基が朝廷に重用されているのを恨んで、山寺に隠れた。その後「智光忽ちに」死んでしまった。

遺言に依りて暫く葬らざるに、十日ありて蘇ることを得つ。弟子等に告げて云はく、閻王宮の使驅りて我を逐へり。路に金殿あり。高広にして光り耀く。我使者に問ふに、答へて云はく、行基菩薩の生るきの処なりといへり。また行きて遠く見れば、煙炎空に満てり。

また使者に問ふに、答へて云はく、汝が入らむと欲するの獄なりといへり。(中略) 今に所以に汝を召すこととは、この罪を懲めむとなりといふ。即ち我をして銅の柱を抱かしむに、肉解け骨融にけり。罪畢てて放ち還せりといふ。智光蘇ることを得て、菩薩に謝せむと欲へり。

(『極楽記』思想大系)

智光は、逝去して蘇生する迄の十日の間に、行基の生まれる浄土と、自分の行く地獄の様子を垣間見る。そして蘇生してその様を語るという設定である。蘇生した本人が死後の様子を語るのだから、充分な説得力を持つものであろう。(この手法は現在でも所謂「臨死体験」という形で興味を持たれ、死後の世界を覗く手段となつてゐる)

智光が前非を悔いて努力精進をしたことは言うまでもない。

又、「橘敏行、発願従冥途返語」(『今昔』十四・二九)では、敏行は俄に死んで、死後の世界の様を見せられ、『汝手慥ニ娑婆ニ返テ、必ズ、其ノ願ヲ遂ゲヨト』云テ、被免レヌト」思フ程ニ活レリ 見レバ、妻子泣キ

悲ミ合ヘリ。二日ト云フニ、夢覺タル心地シテ目ヲ見開タレバ活ニタリトテ喜ビ合タリ。(引用は古典文学大系)

と臨場感あふれる描写で記述されている。これも又冥土の存在を知らしめる根拠となつてゐる。

次に、死者の、往生極楽の様子が他の人の夢に現れる例を見てみよう。

比叡山の僧撰円が加賀の国で出会つた僧尋寂は、妻子を具しているが、夜中に湯を浴みして浄衣に着替え、持仏堂で法華經を読み、念仏を唱えていた。往生の期が熟している。「此ニ暫ク坐シテ我方入滅ニ値給ヘ」と言う。

その日から三七日の間、六時に懺法を行ない、「我レ、今夜、極楽ニ可往生シ」と言い、衣を着て持仏堂にはいり、手に香炉を取り「法花經ヲ誦シ、念仏ヲ唱ヘテ西ニ向テ端座シテ入滅シヌ」撰円はそれを見て感涙にむせんだ。

其ノ里ノ人ノ夢ニ「彼ノ尋寂ガ家ノ上ニ当テ、紫ノ雲聳ク。空ニ微妙ノ音楽ノ音有テ、尋寂、蓮花ノ台ニ居テ、空ニ昇テ去ヌ」(『今昔』十五・二九)

とある。この説話の結びに編者の言葉として、

此ヲ思フニ、実ニ、尋寂、身ニ病無クシテ、兼テ其ノ期ヲ知テ、撰円ニ告テ、共ニ善根ヲ修シテ入滅ス。況ヤ、亦、夢ノ告、可疑キニ非ズ。

慎重に往生の様子を確認していることが理解出来る。即ち、

1、身ニ病無クシテ

2、兼テ其ノ期ヲ知テ

3、夢ノ告

の三重である。その三つの条件が具備しているのであるから、「可疑キニ非ズ」と結論されている。「可疑キニ非ズ」という言葉に、往生の確証を得ることの困難さを垣間見ることが出来る。

又、勝如と教信の話は、無言の行をしている勝如の所に、夜中に来て柴の戸を叩く人があつた。

勝如言語を忌むをもて、問ふことを得ず。ただ咳の声を人ありと知らしむ。戸外に陳べて云はく、我はこれ播磨国賀古郡賀古駅の北の辺に居住せる沙弥教信なり。

今日極楽に往生せむと欲す。上人年月ありて、その迎へ得べし。この由を告げむがために、故にもて来れる

なりといふ。言訖りて去りぬ。

驚いた勝如は翌朝、弟子を遣つてこの実否を尋ねさせると、帰つてきて、

駅の家の北に竹の蘆あり。蘆の前に死人あり。群がれる狗競ひ食競り。蘆の内に一の老嫗、一の童子あり。相共に哀哭せり。

とその様子を語る。

〔極楽記〕よる)

つまり、死に行こうとする本人が、その往生の期日を夜中に告げに来たである。往生の期日を予め承知しているということ、また勝如の往生の期日も知り、それを告げに来たということ、また勝如はその言の通りに、入滅したということ。

此レヲ聞ク人、皆、「必ず極楽ニ往生セル人也」

〔今昔〕十五・二六)

という結縁した人々の感想も納得できるものである。

「美濃国僧菜延、往生語」〔今昔〕十五・三十)では、無動寺の聖人は、美濃に下る道で在俗の僧菜延の家に宿をかる。その聖人に、

某年某月某日、必ず極楽ニ往生セントス。聖人、機縁

深く在マシテ、今、此ノ家ニ来リ宿リ給。必ず其ノ期ニ結縁シ給へ。

と言う。無動寺に帰つた聖人はそのことを忘れていたのであるが、夢に、

東ノ方ヨリ紫ノ雲聳テ聖人ノ房ニ近付ツキ、音楽ノ音空ニ有リ。雲ノ中ニ音アリテ、聖人ニ告テ云ク「沙弥菜延、今日、極楽ノ迎ヘヲ得、往生スル也。先年ニ契リ申シシ事ナレバ、結縁不忘ズシテ、今、来テ告ゲ申也」

と見る。聖人は感涙に咽んだのである。そのあとには、

此ノ事、承平ノ比ノ事也ケリ。

と年号が明示されている。更に、

其ノ後、伝ヘ聞クニ、彼ノ菜延ガ死タル時、違事无シトナム語り伝ヘタルトヤ。

とあり、夢に見た時と、逝去の時が同じであったことを付加して説明している。そのことにより、菜延の極楽往生は確実なものと認識されたのである。往生の様子を夢に見ることがまた、往生の証拠にもなった。

亦、夢ノ告有レバ、疑ヒ无キ往生也トナム語り伝ヘタ

ルトヤ。

〔今昔〕十五・三五)

或る人の夢に「乗蓮入道、船ニ乗テ西方ヲ指シテ行ヌ」
「蓮花ヲ踏テ雲ヲ陵テ空ニ昇ヌ」と見たことが、その内
容であり、往生が確實と信じさせる根拠になっているの
である。

3

地獄や極楽の存在を 信じる事の出来ない人もいた。

「造悪業人、最後唱念仏往生語」〔今昔〕十五・四七)
は、次のような内容である。

某国のある人は、「罪ヲ造ルヲ以テ役トセリ、殺生・
放逸、惣テ死限シ。」という状態で年月を過ごしていた
ので、ある人が、「罪ヲ造レル人ハ、必ズ、地獄ニ墮ル
也」と注意をした。しかし、そのことを信じなくて、『罪
ヲ造レル人ハ、地獄ニ墮ツ』ト云ハ極タル虚言也。更ニ
然ル事不有ジ。何ニ依テカ、然ル事有ラムト」と言い放
つて、いよいよ殺生・放逸を続けていた。ところが、
身ニ重キ病ヲ受テ、日来ヲ経テ既ニ死ナムトス。其ノ
時ニ此ノ人ノ目ニ火ノ車見エケリ。此レヲ見テヨリ後、

病人、恐テ怖ルヽ事死限クシテ、一人ノ智リ有ル僧ヲ
呼テ、問テ云ク、「我レ、年来、罪ヲ造ルヲ以テ役ト
シテ過ツルニ、人有テ、『罪造ル者ハ地獄ニ墮ツ』ト
云テ制セシヲ、『此レ、虚言也』トノミ思テ、罪造ル
事ヲ不止ズシテ、今、死ナムト為ル時ニ臨テ、目ノ前
ニ火ノ車来テ、我レヲ迎ヘントス。然レバ、『罪造ル
者、地獄ニ墮ツ』ト云フ事ハ実ニゴソ」。年来、不信
ザリケル事ヲ悔ヒ悲ビテ、泣ク事死限シ。

この男は、病に沈んで、眼前に火の車を見、前に忠告が
有つたにも関わらず、それを無視して殺生を続けたこと
が俄に恐ろしくなつたのである。

ここに説かれている内容は、地獄の存在を信じていな
い人の例である。「罪ヲ造レル人ハ、地獄ニ墮ツ」と言わ
れても、「虚言」と言い、「何ニ依テカ、然ル事有ラムト」
と全く信じないばかりか、その根拠を求める始末である。
「地獄が存在するならその証拠を」と求める姿勢は現在に
も通じるように思うのである。しかし、まさに死に行こ
うとする時に眼前に「火の車」が出現し、地獄の存在の
事実を突き付けられた不信の男は、自分自身の今迄の行

業を、深く反省せざるをえないものであった。「火の車」という証拠が示されることにより、心を翻す機縁になったのである。従つて、当然その次に記されている、

然レバ、弥陀ノ念仏ヲ唱フレバ、必ず、極樂ニ往生ス、ト云フ事ヲ信ゼヨ。

という僧の言葉は、証拠を求めるまでもなく、掌を合わせて念仏をすることになる。その結果、

火ノ車ハ忽ニ失ヌ。金色シタル大キナル蓮花一葉ナム、目ノ前ニ見ユル

と極樂への往生を暗示する一節が続いている。

死後の世界（地獄・極樂）の存在を全く信じなくて、破戒無慙の生活を続けていた人が、その証拠を示されることによつて回心していくという、典型的ともいへべき説話である。極樂浄土もまた凡夫のはからの前には、その存在がかすんでくるのであろう。それがまた凡夫たる所以なのかもしれない。

『御臨終日記』には、

同（建曆二年正月）廿三日巳時、当坊上紫雲聳、其起雲中更有円戒彩雲、其色甚鮮明、状如画像仏、行道人々於処々諸人見之随喜感歎。弟子云曰。此空已有紫雲已聳之瑞、御往生其近結果歟乎。

同廿四日午時刻、紫雲大聳在起覆于西山。炭焼樵夫十余人皆見之来而語。至廿五日午時刻、声漸細、高声時々相交、集庭若干人々皆聞之、正臨終時、懸被著慈覚大師伝来九条袈裟、頭北面西、誦光明遍照十方世界念仏衆生撰取不捨、如眠命終、（中略）上人往生之後、（中略）旁有不思議夢想等（『法然上人全集』）

と、その臨終の様子が記載されている紫雲の聳く様は大勢の人が結縁している。このことにより、法然の往生は確実なものとして理解されている。かつまた、その薨去の後、不思議な夢を見た人がいるという後日譚も一連の形式の通りである。

そういう視点から把握すると法然もまた、従来の願いの中にあつた人である。

法然は建曆二年正月二十五日に薨去したのであるが、

鸞は、先に述べたように「来迎」を否定している。が、『恵信尼の消息』（古典文学大系）の三通目「常陸の国下妻」に住んでいた時に見た夢の話を述べた箇所に、

堂供養かとおぼへて、東向に御堂は立ちて候にしんがくとおぼえて、御堂の前には松明しろく候に、松明の西に、御堂の前に、鳥居のやうなるに、横さまに渡りたるものに、仏を掛けまいらせ候が、一体は、たゞ仏の御顔にては、わたらせ給はで、たゞ光の真中、仏の頭光のやうにて、正しい御形は見へさせ給はず、たゞ光ばかりにてわたらせ給ふ。いま一体は正しき仏の御顔にてわたらせ給候しかば、これは何仏にてわたらせ給ぞと申候へば、申人は何人ともおぼえず、「あの光ばかりにてわたらせ給は、あれこそ法然上人にてわたらせ給経。勢至菩薩にてわたらせ給ぞかし」と申せば、「さて又、いま一体は」と申せば、「あれは観音にてわたらせ給ぞかし。あれこそ善信の御房よ」と申とおぼえて、うちおどろきて候しにこそ、夢にて候けり、と思て候しか。

後、そのことを夫である親鸞に語ったところが、それは正夢であり、法然上人は勢至菩薩であると教えられる。しかし、観音のことは話さなかつた。

されば御臨終はいかにもわたらせ給へ、疑ひ思まいらせぬへ、

と、思い出を語る形式で、覚信尼あてに語られている。

この書状は大系の注にいうように、親鸞の逝去の時には、所謂臨終の奇瑞のようなものがなかつたのであろう。

そのことについて往生の如何を心配した覚信尼が、母である恵信尼に対して質問したことへの返事と考えられる。

親鸞その人は、前述したように『末灯抄』の中で、

来迎は諸行往生にあり。自力の行者なるが故に。臨終といふは、諸行往生のひとにいふべし。いまだ真実の信心をえざるがゆへなり。（中略）真実信心の行人は、撰取不捨のゆへに、臨終をまつことなし、来迎をたむことなし。信心のさだまる時、往生また、さだまらなり。来迎の儀式を待たず。

と明確に、来迎を否定している。しかし、なお一般にはなかなか徹底していなかつたものであろう。

おわりに

「浄土の存在の確信をどうして得るか」という問題について、先人の努力の足跡を垣間見てきた。浄土は、ここにこうして実在するというような形で、眼前に示すことの出来るものではなかったが、夢の中に、また奇瑞という形をとって、その存在は、ほのかに示され続けている。そして、その存在の確実性を自覚する故に、多くの人々が、生涯をかけて浄土往生の為に努力してきた。

つまるところ、色々な状況証拠（傍証）を積み重ね、最後は一転して、そのことを信ずるという姿に帰結しているように思う。それはあたかも先に述べた造悪の男が、最後に、

弥陀ノ念仏ヲ唱フレバ必ず、極楽ニ往生ス、ト云フ事ヲ信ゼヨ。という言葉を一も二もなく信じたのと同じである。

信じるということは、非常にあやふやな印象を受けるのであるが、考えようによつてはこれほど確実なものはないということも言えよう。

（本学教授）